

資料

共感経験尺度 (EES) の妥当性

——VTR を刺激とした感情内容別検討——

角 田 豊*

VALIDITY OF EMPATHIC EXPERIENCE SCALE (EES)

—— An examination of several feelings by VTR stimuli ——

Yutaka KAKUTA

The Empathic Experience Scale (EES) is a questionnaire constructed in order to measure empathy integrated both in emotional and cognitive approach. The purpose of this study is to examine the construct validity of the EES. 118 male university students were asked to answer the EES. 10 subjects were selected from the higher group and 11 from the lower one. The responses of amplitude and heart rate were measured by a plethysmograph while watching a video tape of a child expressing surprise, sorrow, or joy. Then, they were asked to complete self-reports of the child's feeling and their own feeling concerning the experiment. The result was that the EES was related to self-reports without showing positive physiological signs. The self-reports indicated that the EES had a construct validity for positive feeling of others, but in the case of a negative feeling, empathy and sympathy were mixed. After discussion about the differences, it was suggested that the EES would measure latent empathy with other's negative feelings.

Key words : empathy, experience, feeling, video tape, validity.

問 題

共感性の研究は感情的アプローチと認知的アプローチに大別されることが、多くの研究者によって指摘されている (Mehrabian & Epstein, 1972 ; Feshbach, 1978 ; Davis, 1980 ; Barrett-Lenard, 1981 ; 杉山, 1982 ; Gladstein, 1983)。前者は、主体が客体と同じ感情状態になることが共感の指標となり、後者は主体が客体の立場に立つことが共感の指標となる。しかし、感情面と認知面は相互に関連をもち、一方のみで共感を捉えることは不完全であり、また同一の事象を異なる用語で説明している (Katz 1963)とも言われ、両側面を包括する定義が必要とされてきている (Feshbach, 1978 ; Hoffman, 1981 ; 杉山,

1982 ; 渡辺・瀧口, 1986 ; 浅川・松岡, 1987)。その中で、発達の観点に立った Feshbach や Hoffman らの見解は、認知的な共感の捉え方に、感情・情動的反応をも含めた統合的なものとなっている。つまり、他者のパースペクティブや役割を取るといった認知面に、感情反応が伴って、共感が成立すると考えるのである。こうした共感の捉え方は、従来の一面的な研究や、多面的であっても「共感」としてのまとまりを持たない研究とは異なり、多面的でかつそれらを統合した高次の心的機能が必要となる現実の共感に接近した捉え方と言える。

杉山 (1982) によると、共感性の測定方法には、① GSR, 心拍数, 容積脈波などの生理的指標, ② 反応時間や反応強度などの行動指標, ③ 面接や質問紙に対する応答など、意識的な言語報告を指標とするもの, ④ 行動観察や反応の評定などの観察法, の4種類に大ま

* 鳴門教育大学 (Naruto University of Education)

かに分類される。③に含まれる質問紙法では, Dymond (1948, 1949)の研究があるが, 彼女の測定方法は予測的尺度であり, 主体と客体の評定の一致度をもって共感性の指標としている。しかし, このような測定法による共感性は, 一般化された静的で知的な過程と言え, 共感に必要な自発性や直接性に欠ける, といった批判が見られる (鳴沢 1975)。Mehrabian & Epstein (1972) はこうした予測的尺度の批判・検討から, 他者に対する感情的な反応を測定する情動的共感性尺度を作成した。この尺度は加藤・高木 (1980), 渡辺・瀧口 (1986) によって日本語版の作成が試みられている。加藤・高木は, 独立したと考えられる 3 つの下位尺度 (1. 感情的暖かさ, 2. 感情的冷淡さ, 3. 感情的被影響性) を因子分析から抽出している。1. は他者に対する肯定的な感情反応と芸術に対する感情移入傾向を, 2. は他者に対する否定的な感情反応あるいは無関心な傾向を, 3. は他者の感情に反応し動揺する傾向を測定するものである。渡辺・瀧口も, ほぼ同様の 3 因子を認めている。この情動的共感性尺度は, 先述した感情的アプローチに沿った内容を持つが, 必ずしも共感的な体験だけではなく同情的な態度 (「私は会計事務所に勤務するよりも, 社会福祉の仕事をする方がよい」) や主体の能動的な共感とは言えない内容 (「まわりの人が神経質になると, 私も神経質になる」等) が混在しており, Mehrabian & Epstein の原版のように一元尺度として用いるならば, 共感以外の内容がそこに含まれてしまう。しかし, 加藤・高木のように独立した下位尺度をもつと考えた場合は, 確かに多面的に検討することは可能だが, 「感情的暖かさ」の高い人は共感性が高く, 逆に「感情的冷淡さ」の高い人は共感性が低いと明確に定義できるとは言えず, 共感性の指標としては不十分な点がある。共感性と他の人格特性, あるいは向社会行動や援助行動との関連を研究したり, 共感性の発達過程を研究する場合には, 基礎的な共感性の指標の確立が必要と考えられる。

角田 (1991) は, 一元尺度として共感性を測定できる質問紙を作成する試みとして, 共感経験尺度 (empathic experience scale, 略称 EES) を開発した。EES の作成にあたっては, 従来の研究の批判・検討から以下の 5 つの観点を基本に置いた。①情動伝染など受動的で他者理解には至らない内容を含まない。②客体 (相手) と同様の感情体験がなされ (感情的アプローチに基づく), 態度のみを内容としない。③客体の立場に立つ (パースペクティブ・テイキング) 視点を含む (認知的アプローチに基づく)。④共感的な内容は社会的に望ましいと考えられ, 偽りの反応が生じる可能性がある。その効果をできるだけ除

くため, 過去の経験という制約を設ける。⑤感情の種類 (喜び, 悲しみ等) に幅をもたせる。EES は考案された 24 項目を大学生 223 人 (男性 118 人, 女性 105 人) に 5 件法で施行し, 上位・下位分析と因子分析によって選ばれた 20 項目からなる。因子分析の結果からは, 次のような 3 因子構造を持つことが明らかとなった。第 1 因子は「相手の否定的な感情体験に対する共感の因子」とされた (「悲しんでいる相手の気持ちを感じとうとして, 自分もその人の悲しさを経験したことがある」等 8 項目)。第 2 因子は逆転項目からなり「対人関係の保持の因子」とされた (「相手の気持ちを感じとうとしたことはない」等 7 項目)。第 3 因子は「相手の肯定的な感情体験に対する共感の因子」とされた (「相手が何かを期待しているときに, そのわくわくした気持ちを感じとったことがある」等 5 項目)。

EES は先述した情動的共感性尺度日本語版との比較・検討がなされ, 質問紙間の基準関連妥当性が高く, また, より精細な分析の結果から, 5 つの観点をほぼ満たすものと考えられた。しかし, 質問紙間の比較のみでは, EES が構成概念妥当性を持つかは明らかでないため, 他の測定方法との比較が必要と考えられる。本研究では, 実験条件を設定し被験者の言語報告と生理的指標 (容積脈波と心拍数) から共感性を測定し, EES の妥当性, 上記の観点では①～③について検討する。

共感するということは, 主体がその体験を意識的に捉えうる現象であり, 実験条件の中で共感が生じれば被験者の言語報告に反映されると考えられる。また, 共感とは他者の体験を感じとることであり, 感情反応が起こることはその必要条件と考えられる。しかし, それが生理反応に直接反映するかどうかは明らかでない。これまでの生理的指標を用いた共感研究では, 主に実験条件を操作することで, 条件づけとしての共感的反応を測定しており, 共感性の個人差についての研究はなされていない。しかし, その実験結果を見ると, 共感的反応が生起するであろう条件において, 生理反応が多くみられる結果もあり (Berger, 1962), 共感性の個人差が生理反応に反映されるかもしれない。本実験の構成によって, 量的に測定される感情反応 (生理指標) と, 質的に測定される反応 (言語報告) とを比較することが可能になると考えられ, 異なる視点から EES の妥当性を検討するのが目的である。

方 法

被験者

男子大学生 118 人 (平均年齢 20 才)。EES を施行し, 高得点者群 (以下 H 群とする) から 10 人, 低得点者群 (以下

L群とする) から11人を対象とする。

刺 激

保育園の日常生活を録画したビデオテープ (約10時間) から、①練習編 (約5分間)、②感情表現編 (約2分間) × 3、以上4本が編集・作成された。幼児をモデルとする理由は、感情表出が豊かで演技による作られた表現ではないこと、またモデルに対する被験者の好悪感情が成人のモデルに比べ少なくなるであろう、という2点からである。①は、特定の幼児を対象とせず、感情価の低いと思われるシーンが選ばれた。構成は園庭での遊び、昼食の用意、昼寝の終了時の3シーンからなる。練習編は、被験者がビデオに慣れ、保育園の雰囲気を知ることが目的とされた。②の感情表現編は、a 驚き、b 淋しさ、c 喜び、の3編を作成した。a は、2才半の男児がまず何かを見つけだして歩き出す。歩く先に水場があり、他児が遊ぶ中へ、本児も加わる。1つの水道を自分のものにし、流れる水に手を差し出す。水しぶきが顔や手にかかり驚く。栓をいじるとさらに水が強まり、またしぶきがかかって驚くという内容である。b は、室内遊戯の時間で、7、8人のグループが2組あり、交互にピアノに合わせて走り回る。5才の女児が他のグループの走りを見ている。次に本児のグループの番となるが、皆は駆け出すのに本児だけ無表情で椅子に座ったままである。他児が本児の側を走り抜け、体が触れることもあるが、そのままにいるという内容である。c は、同じく室内遊戯の時間で、数人がピアノに合わせて歌う。5才の女児が皆の手を引いて元気よく歌い、思わず近くの男児に抱きついて踊り出すという内容である。a～c は、各々が始まる前の20秒間に、主人公となる幼児の静止画が付けられた。

装 置

カラーモニター (12型)、ビデオテープレコーダー、容積脈波の測定には、三栄測器製反射型トランスジューサーと同社製 AC ポリグラフ (TYPE1A12-14) が用いられた。

手 続

被験者は個別に実験室に案内され、安楽椅子に着席する。カラーモニターが1.5m 離れて設置され「これから保育園の子どもの様子を写したビデオを見てもらいます。見ている間にあなたの心拍数を測定したいので、この装置を付けて下さい」と教示の後、被験者の左手第二指にトランスジューサーが付けられる。「これから子どもの生活している様子を見てもらいます。はじめの5分間は保育園の雰囲気になれて頂くために、眺めていて下さい。5分たったら私 (実験者) が入ります」

と教示をし、実験者はビデオのスイッチを入れて実験室を退出する。練習編終了後、実験者は再入室し「では次に2分くらいのビデオを3本見てもらいます。今度は先程とは違って、一人の子どもについて注目してほしいのです。どの子どもに注目するかは、ビデオが始まる約20秒間前に、その子どもを静止画像で映しますので、この子どもだということを確認しておいて下さい。各ビデオが終わりましたら、簡単な質問に答えて頂きます。では始めますが、あなたは見ている間、その子どもになったつもりで見て下さい」と教示を与え、被験者が教示を理解したか、特に「その子どもになったつもりで」という点を被験者の同意で確認した後、ビデオのスイッチを入れ退出する。感情表現編 a～c のそれぞれが終わる毎に実験者は入室し、質問用紙を被験者に渡し、その場で記述してもらう。質問項目は①被験者のモデルに対する同一化とその結果生じる他者理解の程度を尋ねる「この子どもは、どんな気持ちを感じていると思いますか」と、②モデルに対する被験者自身の感情、つまり他者理解の方向性の有無を尋ねる「あなた自身は、この子どもに対してどのように感じましたか」の2つからなる。生理反応については、ビデオテープ再生中をすべて記録する。記録は紙送り速度0.7cm/sec、時定数1.5秒で行った。

結果の整理

自己記述の評定

(1) 共感の程度と、(2) モデルに対する好悪感、の2つの観点から評定が行われた。以下にその評定基準を述べる。

(1) は質問項目の①②から渡部 (1963) を参考にして、ビデオ中の幼児に対する共感の程度を分類した。分類カテゴリーは「知的レベル」「同情的レベル」「共感的レベル」の3種類を設定した。「知的レベル」には、ビデオ中の幼児を外的な対象とのみ捉え他人事のように眺めている反応と、知的な概念の枠にはめ込もうとする反応が含まれ、ビデオ中の幼児に同一化した感情体験の記述が見られないものである。「同情的レベル」は、共有的な感情体験をしていると考えられる記述があるが、ビデオ中の幼児をあくまで自分より劣った「子ども」として捉え、優劣の観点が含まれる反応である。「共感的レベル」は、同一化した感情体験の記述が見られるもののうち、自己の感情を客観化した反応と、さらに援助行動を示唆する反応が含まれる。

(2) は質問項目の②のみから、ビデオ中の幼児に対する被験者の好悪感を分類した。分類カテゴリーは「肯

定的」「中立」「否定的」の3種類を設定した。

評定は筆者と心理学を専攻するもう1名によって独立に行われた。両者の一致率は、(1)が81%で、(2)が85.7%であった。一致が見られない場合は、分類基準について話し合われ、再評定を行った。

生理反応の処理

容積脈波は情動反応を反映するとされている振幅についての処理を行う。練習編・感情表現編は共に上映時間の終わり1分間を処理対象とした。処理方法は清水(1969)を参考にし、5秒毎の最大波高を求め、振幅12個の平均値を算出した。さらに練習編の平均値を1とし、各感情表現編の相対的振幅を求めた。心拍数についても、上映時間の終わり1分間の心拍数を計算し、練習編を基準として、その絶対値の増減を求めた。

結 果

1. 自己記述について

EESのH・L群別の「共感の程度」についての分類度数をTABLE 1に示す。両群間の差を見るため、a「驚き」とb「淋しさ」の両刺激に対する分類については直接確率法を用い、c「喜び」に対してはYatesの修正式を用いて χ^2 検定を行った。その結果、aには有意差が見られず、bには有意差が見られた($p<.05$)。bにおける差がどの分類に特徴的であるかを見るため、さらに1つの分類とその他の分類として2×2分割にし、Yatesの修正式を用いて χ^2 検定を行った結果、「同情的レベル」がH群に多い傾向が見られた($\chi^2=3.82$, $df=1$, $p<.10$)。またcには有意差が見られ($\chi^2=4.03$, $df=1$, $p<.05$)、EESのH群はL群より有意に「共感的レベル」の反応が多いことが示された。

次に、H・L群別の「モデルに対する好悪感」についての分類度数をTABLE 2に示す。両群間の差を見る

TABLE 1 共感の程度についての分類度数

	刺激 a			刺激 b			刺激 c	
	知的	同情的	共感的	知的	同情的	共感的	知的	共感的
H群	4	5	1	2	7	1	4	6
L群	6	3	2	7	2	2	10	1

TABLE 2 好悪感の程度についての分類度数

	刺激 a			刺激 b			刺激 c		
	posi.	neu.	nega.	posi.	neu.	nega.	posi.	neu.	nega.
H群	7	2	1	8	2	0	4	6	0
L群	4	6	1	2	5	4	4	6	1

ために直接確率法を用いた結果、bにおいて有意差が見られた($p<.05$)。bにおける差がどの分類に特徴的であるかを見るため、さらに1つの分類とその他の分類として2×2分割にし、Yatesの修正式を用いて χ^2 検定を行った結果、「肯定的」な態度が有意にH群に多く見られた($\chi^2=5.74$, $df=1$, $p<.05$)。

2. 生理反応について

容積脈波：H・L群が各刺激に対して、練習編と比較して振幅がいかに変化したか、その平均値をTABLE 3に示す。また、変化の絶対値をグラフにしたのがFIG. 1である。各々の変化について、wilcoxon's sign rank

TABLE 3 振幅の変化の平均値

	a	b	c
H群	-.30*	-.09	-.01
L群	-.29**	-.11	-.25*

** $p<.01$ * $p<.05$

検定を行った結果、aのH群、L群とcのL群に有意な変化が見られた。振幅は練習編に比べていずれも減少しており、血管収縮反応を示している。これはビデオを見ている被験者に何らかの情動が喚起されたと考えられる。

心拍数：容積脈波と同様の分析を行った結果、aのH群、L群に心拍数が増加する傾向が見られた($p<.10$)。

3. 自己記述(共感の程度)と生理反応の関係

H・L群に関係なく、自己記述と生理反応の関係を見た。a～cの刺激毎に、各分類カテゴリーに生理変化があるか。wilcoxon's sign rank 検定を行った。その結果をTABLE 4に示す。aでは振幅減少が「知的レベル」「同情的レベル」に見られ、心拍数も両分類において増加する傾向が認められた。「共感的レベル」は度数が少ないため、検定が行えなかった。bではいずれの分類にも振幅・心拍共に変化は見られなかった。cでは「知的レベル」において振幅が有意に減少し、「共感的レベル」では変化が見られなかった。

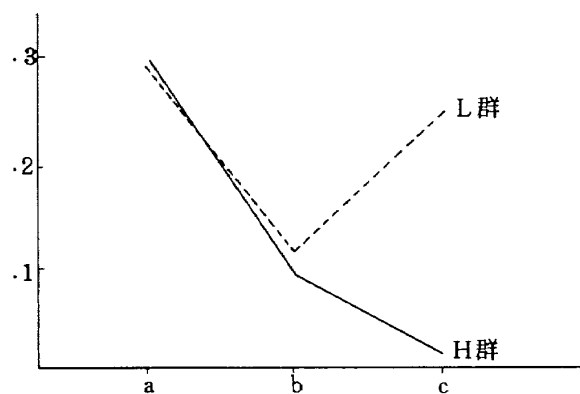


FIG. 1 振幅の変化の平均値(絶対値)

TABLE 4 自己記述と生理反応の結果 (wilcoxon's sign rank 検定の結果)

	a		b		c	
	振幅	HR	振幅	HR	振幅	HR
知的	***	*	n.s.	n.s.	***	n.s.
同情的	**	*	n.s.	n.s.		
共感的			n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

*** p<.01 ** p<.05 * p<.10

考 察

1. 自己記述について

EES 得点のH・L群と自己記述の関係を見ると、刺激b, cについては両群間に「共感の程度」と「モデルに対する好悪感」に有意差が見られ、aには差が見られなかった。この理由としては、刺激b, cの内容が他児との関係の中での主人公の感情表現であるのに対し、aでは主人公である幼児の一人遊びが中心で、その感情表現も水に対する感覚的なレベルのものであることがあげられる。EESはその内容が対人関係レベルの感情を扱っており、感覚レベルの感情である刺激aとは関連が見出せなかったものと思われる。

「共感の程度」についてはcにおいて有意差が見られ、bには見られなかった。bでは「同情的レベル」に有意差が表われ、また「モデルに対する好悪感」にも差が見られた。EESは作成時の観点②にあるように、客体(相手)と同様の感情体験がなされ、態度のみをその内容としない構成になっている。これは共感体験と、優劣の関係をその背景にもつ同情あるいは同情的態度とを識別しようとの意図からであるが、本結果からはその識別が容易ではないことを示している。cのような客体の肯定的な感情表現については問題はないと言える。なぜなら「同情」は他者の喜びの気持には生じないからである。そうではなく一般に同情の対象となる他者の「悲しみ」「苦しみ」といった否定的な感情表現(刺激b)の場合、相手の感情を共有し他者理解の方向性を持ちながらも、その主体の体験が客体(相手)の理解に至らない場合が考えられるのである。角田(1991)が他の共感性質問紙と比較・検討したように、EESは、質問紙レベルでは態度としての同情を識別しうると言えるのだが、本研究のように他の測定方法を用いた結果を見ると、共感と同情が混在している面がうかがわれる。この点を明確にするために、態度としての同情と、体験としての同情を区別して考える必要

があると思われる。厳密に表現するなら、同情的態度と共有体験に基づく同情の区別と言える。

共感のプロセスを考える際、まず必要なのはバランスのとれた自他の区別が確立されていることである。ここで言う自他の区別とは、乳幼児期的なレベルでの自己と他者の分離は踏まえた上での、青年期的な心性としての意味である。青年期は、第二性徴を始まりとする身体的・心理的な自己への関心が高まる時期である。したがって、他者との関わりにおける主体の感情面、認知面は、自己中心的な視点から捉えられる傾向をもつものと思われる。共感には、他者のパースペクティブを取ったり、役割取得能力が機能すること(認知的アプローチ)と、その一方で、自己と他者の一時的な融合状態が必要となる(感情的アプローチ)。この2つの側面が統合的に機能することで共感が生じると考えられるが、その前段階として、2つのあり方を想定できるように思われる。1つは、認知面が自己中心的な場合であり、もう1つは感情面の捉え方が自己中心的な場合である。前者は、他者のパースペクティブに立つこと自体が不可能であり、共感の可能性は低い。それに対して後者は、他者のパースペクティブはある程度取れ、共有体験も生じるのであるが、その体験を他者理解の方向で捉えることができず、共感としては不十分なのである。後者については、未熟な共感性と呼ぶことができるのではないだろうか。本研究で述べた同情はこの後者の段階に位置づけられるように思われる。Piaget (1964) や Elkind (1967) らが言うように、青年期では脱中心化が発達的に1つのテーマとなる。同情の場合、主体はある程度共感性を機能させるが、自己中心の段階から抜け切れていないために、他者理解へと向かうことはできず、主体に生じた共有感情を自己に引き寄せて捉えるものと思われる。しかし、主体の自己知覚としては、同情の段階でも、共有体験がなされていることから、共感したと知覚されてしまうのではないだろうか。

このように見ると、EESは体験を伴わない同情的態度は識別しうるが、共有体験を、共感として捉えられているか、あるいは同情として捉えられているかの識別は不十分と言える。EESの妥当性としてみると、客体の否定的な感情に対する場合は十分とは言えず、未熟な共感性もそこに含まれてしまう。現段階で言えることは、共有体験をしていると考えられる点で、潜在的な共感性は測定されているということである。一方、より共感が明確な客体の肯定的な感情に対しては、妥当性を持つものと思われる。

2. 生理反応について

生理反応の結果から、刺激aについてはH・L群いずれも、またEESとは無関係にみた分類毎の結果からも、容積脈波の振幅と心拍数に変化がみられた。容積脈波の振幅が減少したことは血管収縮反応であり、心拍数の増加する傾向と共に、何らかの情動が喚起されたと考えることができる。しかし、こうした生理的な変化は、aにおける自己記述に差がなかったことから、記述内容との関連はないと言える。むしろ、aにおける生理的变化は、刺激の性質によるものであろう。aとb、cの相違点は、感覚的な内容のものと、対人場面的なものと考えることができ、aで得られた変化はビデオ中の子どもが手に水を当て、その感触に繰り返し驚くという内容にあったと考えられる。したがって、生理的指標は従来実験心理学的方法で行われてきた、感覚的な感情レベルの共感的反応の測定に適しているように思われる。

cのL群においては、容積脈波の振幅に変化がみられたが、一方自己記述についての結果は、先に見たとおりH群がL群よりも有意に「共感的レベル」の反応が多いというものである。したがって、L群には「知的レベル」の反応が多いわけで、このカテゴリーの被験者に情動反応が生じたことになり、一見矛盾した結果と言える。ビデオ刺激の内容を見ると、主人公となる子どもは音楽にあわせて踊り、歌っている。また、歌う際は側の男児に抱きつくなど、運動的要素が多分に見られる。aで見たように生理反応が感覚的な刺激を反映するのならば、H群も当然高くなるはずであるから、この場合は一概に運動的要素に帰することはできない。L群の「知的レベル」の反応内容を見ると、ビデオ中の子どもに対して客観的、説明的であり、その態度は「中立的」なのだが、「よい」と述べる反面「でしゃばっている」「やりすぎている」といった記述が見られ、不快感を抱いていることが推測される。こうした他者の肯定的な感情表出に嫌悪感を持つ傾向は、EESとは無関係に見た結果にも表われている。「知的レベル」の被験者は、他者の肯定的な感情表出に否定的な情動反応をするが、その反応は自己記述の段階では直接的に表現されることなく、知的な統制を受けて表現されるために、情緒的に中立の印象を与えられとされる。つまり、知的な外界への反応様式の背景に衝動的な側面があると思われるのである。EESの妥当性としてみると、他者の肯定感情に対して、EESの低得点者は殆ど共感できていないと言え、むしろ情動的に強い否定感情を抱いている。

3. まとめ

本研究では、EESの構成概念妥当性を検討するために、ビデオ録画された幼児の感情表出を刺激として、自己記述と生理反応から共感性の測定を試みた。EESとの関連がみられたのは、自己記述であった。生理反応は、EESと肯定的な関連はみられなかった。つまり、EESの測定する共感他者の感情を量的にはではなく、質的に共有し理解する側面が強いと考えられる。この点は、共感現象を考えていく上で1つの視点を与えるものと思われる。

次に客体（他者）の感情状態を、否定的なものと肯定的なものに分けて考えた場合、肯定的な内容（例えば他者の喜び）に共感する点で、EESは妥当性を持つと考えられた。しかし、否定的な感情内容（他者の悲しみ）に共感する点で、EESには不十分な点がみられた。作成時の観点にあるように、共有体験を伴わない態度のレベルの反応はEESに反映されないと思われるが、体験が共感に至らず同情になる場合は、EESに反映されるのである。これは共感と同情の区別の難しさを表わしており、同情的反応は未熟な共感性と考えられた。

作成時の観点に照らしてみると、②の客体と同様の感情体験についてはEESはその条件を満たすと考えられる。しかし、観点の①と③については、感情の内容によって、客体の立場に立とうとするも他者理解に至らない場合も含まれるため、EESはそれらの条件を十分に満たすとは言えない。

ところで、共感と同情の区別といった以上のような結果が得られたのは、本研究が感情内容を肯定的なものと否定的なものに分けているからであり、従来多かった否定的な感情のみを扱った共感研究では見逃されがちな点であったと思われる。刺激を感情内容で区別することによって、同じEES得点の高い主体であっても同情的であったり、共感的であったりする点が示されたが、このことは両過程の類似性を示すと共に共感性そのものが流動的な性質を持つことを示しているとも考えられる。したがって、EESに同情的側面が反映される点は、こうした共感能力の流動性を示しているとも考えることもできる。また、向社会行動の動機づけとして考える場合に、共感性が動機づけとして機能する立場の研究者と否定的な立場の研究者がある（松崎・浜崎1990）が、こうした相違は、共感性の測定に共感と同情が混在しやすく、その区別をしないまま研究を進めているために生じたとも考えることもできる。

本研究の結果から、EESは、一元尺度として用いる場合は、否定感情に対する潜在的共感性が含まれる点

を考慮に入れる必要がある。当初の目的は、一元尺度の構成であったが、上記の結果を鑑みると、自他の分化度を測定できる指標を加える必要があり、また因子別の検討も必要と思われる。今後さらに妥当性を高める方向で研究が求められる。

引用文献

- 浅川潔司・松岡砂織 1987 児童期の共感性に関する発達的研究 教育心理学研究, 35, 231—240.
- Barrett—Lenard, G.T. 1981 The empathy cycle : Refinement of a nurcular concept. *Journal of Counseling Psychology*, 28, 2, 91—100.
- Berger, S.M. 1962 Conditioning through vicarious instigation. *Psychological Review*, 69, 450—466.
- Davis, M.H. 1980 A multi-dimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10, 85.
- Dymond, R.F. 1948 A preliminary investigation of the relation of insight and empathy. *Journal of Consulting Psychology*, 12, 228—223.
- Dymond, R.F. 1949 A scale for the measurement of empathic ability. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 127—133.
- Elkind, D. 1967 Egocentrism in Adolescence. *Child Development*, 38, 1025—1034.
- Feschbach, N.D. 1978 Studies on empathic behavior in children. *Progress in Experimental Personality Research*, 18, 1—47.
- Gladstein, G.A. 1983 Understanding empathy : Integrating counseling, developmental, and social psychology. *Journal of Counseling Psychology*, 30, 467—482.
- Hoffman, M.L. 1981 依田・宮前訳 道德性の発達—道德的思考・感情・行動の発達— 依田 明監訳 現代児童心理学 4 情緒と対人関係 金子書房
- 角田 豊 1991 共感経験尺度の作成 京都大学教育学部紀要, 37, 248—258.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33—42.
- Katz, R.L. 1963 *Empathy : its nature and uses*. The Free Press of Glencoe, London.
- 松崎 学・浜崎隆司 1990 向社会的行動の動向—内的プロセスを中心にして— 心理学研究, 61, 193—210.
- Mehrabian, A. & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525—543.
- 鳴沢 實 1975 共感と心理療法 春木・岩下編著 共感の心理学 川島書店
- Piaget, J. 1964 滝沢武久訳 思考の心理学—発達心理学の6研究— みすず書房
- 清水秀美 1969 実験的に誘導された不安時における容積脈波の振幅変動 京都大学教育学部紀要, 15, 120—127.
- 杉山憲司 1982 共感の実証的研究について(その1)—共感の定義と測定法— 東洋大学紀要教養課程編, 21, 1—10.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ 1986 幼児の共感と母親との関係 教育心理学研究, 34, 324—331.
- 渡部 淳 1963 治療関係における共感過程についての実験的考察 臨床心理, 2, 3, 128—142.

(1991年10月24日受稿)